

尾崎紅葉と西洋文学

——「東西短慮之刃」及び「八重襷」を中心として——

赤 瀬 雅 子

硯友社のできたのは、創立の一員丸岡九華の「硯友社文学運動の追憶」^(註1)によれば、明治18年2月なかば、紅葉の下宿に、東京大学予備門の学生たちが集まったことにはじまるという。これから数年間、彼らが『我楽多文庫』編集の場所を転々とかえていた時代、すなわち文壇の「白柄組」と自称していた時代には、おおいに外国文学についての議論をしたものであったらしい。

玄関より右手段階子を登れば二階は三疊と六疊、此処硯友社の本城にして、編輯室ともなり倶楽部ともなり、胫推し腕相撲の道場ともなり、団子蕎麦館の競食場ともなり、西鶴シェキスピア三馬京伝、デッケン金聖嘆研究所明治文壇の松舞台文豪詞宗の梁山伯と自称す。

この雰囲気は、後の紅葉を考える場合、ことに重要な点である。また山田美妙が言文一至体の創造に苦心をし、真摯な相談相手にしたのが、紅葉をはじめとする硯友社の仲間であったことを忘れてはならない。「美妙は外国文の談話語と文章語との一致を、国文にも応用してみんとの意見を時々自分等に相談せしことあり」と「硯友社文学運動の追憶」にも述べられている。

紅葉の手がけた翻案、翻訳の俯瞰図的研究としては、富田仁氏の「尾崎紅葉と外国文学」^(註2)が、詳細に紅葉の面目を伝えている。

翻案作品としては、『アラビアンナイト』から『やまと昭君』（明治22年）

『東西短慮の刃』(33年),『デカメロン』から『冷熱』(27年)『鷹料理』(82年)『三箇条』(28年)『銃の鉛』(30年)『手引の糸』(31年),アンデルセンから『二人椋助』(24年),グリムから『浮木丸』(29年),モリエールの作品から『夏小袖』(25年)『恋の病』(25年),ゾラの作品から『むき玉子』(24年)『おぼろ舟』(25年)『隣の女』(26年),マリヴォーから『八重だすき』(31年)などの作品が書かれている。このほかにトルストイの『名曲クレーツェロフ』(小西増太郎と共訳,明治28年),ロシアの小説『寒牡丹』(長田秋濤と共訳,原作者不詳,原題『雪の夜』?) (明治33年)ドーデの『をさな心』(甞夢生と共訳,明治35年)ツルゲーネフ『投書家』(夏葉訳,紅葉閣,35年)ドストイェフスキイ『胸算用』(瀬沼格三郎下訳,35年)レッシング『草分衣』(紅葉訳,36年)チエーホフ『月と人』(夏葉と共訳,36年)チエーホフ『写真帖』(夏葉と共訳,36年)ユーゴー『鐘楼守』(長田秋濤と共訳,36年)などの翻訳を出している。多くの場合,共訳者として当時の新進の外国文学者の翻訳を紅葉が補筆するという操作が行われていたものと考えられる。

さらに富田氏は,紅葉の読書は英文学から出発してシェークスピアに傾倒したが,次第にドーデ,ゾラ,モーパッサン,モリエールなどのフランス文学に関心を抱くようになり,さらにアンデルセン,グリム,ボッカチオの翻案,翻訳を行った後,晩年にはロシア文学に深い興味を示したこと,そしてその原因としては瀬沼夏葉の入門が刺戟を与えたのであらうと,その仕事の跡を巡って分析している。

後にまた触れたいと思うが,透谷が「粹を論じて伽羅枕に及ぶ」(註3)の中で「紅葉は当今の欧化主義に逆つて起りし文人なり。純粹の日本思想を以て文壇に重きを待する者なり。」と述べたこととは,一見,対極にあるとみえる紅葉の西洋文学への関心の本質は如何なるものか,多少の考察をしてみたい。

先述の富田氏の論文に挙げられていた「東西短慮之刃」は、明治32年12月、読売新聞社主催の文学講演会で話したものを、翌年1月『読売新聞』に掲載したものである。角書きには「武蔵の名香」「阿刺比亞の林檎」と併記されて居り、東をわが国の武蔵の国に、西をアラビアのバグダッドにとったものである。

「武蔵の名香」は紅葉によると、宝永6年に刊行されたもので、作者は錦文流にしきぶんりゅう、十卷より成る『本朝諸士百家記』のうち的一篇、「武蔵国花房奎之丞短慮之事」である。

あら筋は、花房奎之丞の美しい妻やつが、納涼船にわずかな供廻りの者だけを連れて乗っていたところ、やつに魅かれた数名の武士が無体にも彼女の船に乗り移ろうとしたので、やつは気転をみせ、夫が殿より拝領した蒔絵の香箱に入れた名香を川に流し、武士たちに競争心を起させ、拾わせるように仕向ける。しかし香箱は川下に舫った舟の主で同じ家中の道化者箕島富右衛門に拾われてしまう。この年の秋、宿直番に当たった箕島は、過ぎる夏の頃、納涼船で美女と密会したところ、女がまたの逢瀬を誓うしるしにと香箱をくれたとほらを吹く。宿直番の中には奎之丞もいた。彼は口実を作って箕島から香箱を借り、堅く包んだ上に手紙をつけ、やつに命じて生家の父奥右衛門の許に届けさせる。老人は書面をみるなり、一刀のもとに息女やつを切り、その首を婿の許に届ける。奎之丞は首を確かめた後、すぐに箕島方に女讐討ちに赴き、箕島を切った後、自害するというのである。

「阿刺比亞の林檎」は、『千夜一夜』の中の「三個の林檎」であるが、紅葉は他の筋を省略し、「武蔵の名香」に似通った部分のみを紹介している。

あら筋は、バグダットの商人の妻が長患いに罹り、りんごが食べたいと訴えるが、炎暑のバグダットでりんごが見付かろう筈もなく、優しい夫は、わざわざ二週間の旅をしてバルソラに行き、三箇のりんごを求めて帰る。ようやくりんごが手に入ってみれば、妻は病人の気紛れから、食欲を失ってしまっていて見向きもしない。商いを休んだ分を取り戻そうと夫が毎日市場で働いていると

数日後に、黒人の奴隷がりんごを持って通りを走って行くのが目に止まる。呼び止めてりんごを手に入れた訳をたずねると、夫に遠方までりんごを買いにやらせた有夫の婦人と密通して、貰ったものだという。商人は家に帰ってすぐさま女房をナイフで刺し殺し、憎さの余り死体をばらばらにし、鞆に入れてチグリス河に棄ててに行く。家に帰ると総領息子が門口でうろついているので問いただしたところ、息子は母親の枕許から無断で取ったりんごを黒人に奪われたから母親に詫びてくれというので、夫は呆然として涙にくれるというものである。

講演をほぼそのままに書き記した感のある「東亜短慮の刃」の文体にも紅葉独特の調子があるが、ここで重要な問題はそのことではなく、紅葉の着眼である。紅葉はこの作品の序文で、次のように述べている。

私の弁ずる所は、強ち筋のみを御聴に入れるのではない、日本で元録頃に起つた武家の騒動の話と、彼のアラビアンナイツの中に在る話と極めて筋が似て居る、似て居るのではない、同根より生じた者でなければ、定て孰乎が翻案であらうと想はれるくらゐ。それで彼の有名なるイソツプ物語が、寛文頃でありましたが、伊曾保物語として、絵入で翻訳されて居ります所から考へると、或は是もアラビアンナイツの話が長崎あたりに渡つて来て、其を大阪の作者が聞伝へて、此方の筋に引直したものであらうも知れませぬ。果して彼の翻訳なるか、又は暗合であるか、其辺はまだ研究して居りませんから、爰には姑く疑を存して措く。

作品の筋に凝り、西洋の小説を読み漁るばかりではなく、その筋を聞き漁る感のあった紅葉が、この講演では、「強ち筋のみを御聴に入れるのではない」と断りながらも、結果においては二作品の筋のみに触れているのは如何なることであろうか。

ここには直観的ながら、やや行き詰っている現在の比較文学を魅力あるもの

に甦らせる研究方法のひとつである対比研究の問題が、驚く程適確に提起されている。

影響関係の無いと思われる二作品を二国の文学の中から任意に選び出し、比較することはもとより自由であるが、それには何よりも鋭い直観が必要である。そうしたふるいに掛けられて選び出された二作品には、しばしば、紅葉の「東亜短慮の刃」の序文には結論を見ずに投げ出されてはいるが、明らかに紅葉が考えていたように、同じ源泉に溯るものがあるのである。

紅葉のいう「筋」とは、単なる梗概のことではなく、作家の内面に働きかけ、想像力を刺戟する働きそのものことであると言っても、あながち過言ではなかろう。紅葉があくことなく小説の「筋」を求めた秘密も、ここにあると思われる。

また、最初イギリス文学に触れた紅葉が、ついでフランス文学に興味を示し、さらに西欧とアラブ世界とを包括した地中海文化圏に関心を抱き、最後にロシア文学に到達したという過程も、総花的興味を意味するものではなく、常に自己に本質的な衝撃を与える新しい世界を追っていたことの証左と言えよう。

先述した北村透谷の「粹を論じて伽羅枕に及ぶ」には、また次のように述べられている。

粹と俠とは従来の諸文士の理想なりしに今日の紅葉にして鞭を挙げて此問題に進まんとは余の期せざりしところなり、さはれ紅葉は徳川時代の所謂好色文士とは異れり、一篇の想臆好色を画くよりも寧ろ粹と俠とを狭き意味の理想に凝らし出でたりと見るは非か。

そして透谷は「余は此書の価値を論ずるよりも寧ろ此著の精神を覗ふを主とするなり」と述べ、その「美」の追求に共鳴している。「理想に凝らし出でた」「粹と俠と」、そこに追求されている「美」は、西欧文学の影響なくしては

生まれぬものである。粋や俠を理想に凝らして新しい知的世界を構築することは、戯作者には不可能なことである。

この点を究めるための一筋の糸として、紅葉と長田秋濤との関係が浮び上る。

秋濤は明治4年静岡県に生まれ、学習院から二高を経て渡欧し、ケンブリッジ大学及びパリ大学に学んで帰朝した後、演劇改良運動をなそうとした頃から、紅葉と親しく交わった。デュマ・フィスの著わした「ラ・ダーム・オー・カメリア」を「椿姫」と訳したのも秋濤であり、また完訳をなしとげたのも秋濤である。「思ふに普通^{なみ}の人間^{ひと}が一度死ぬものなら、斯^{こんな}麼女は罪業の報で二度死ぬ訳である。青春^{よはい}の齡^と傾いて色香衰へるのが榮華^{みじまい}の夢の見終で、先づ浮世では死ぬ訳になる。」と、この作品の自らの訳の一節にあるドミ・モンデーヌのパリを語り、美も醜も併せてパリこそが都会中の都会であることを語るには、秋濤は文人としては一種のアマトウルであると同時にディレクターとしては第一人者であったからこそ最適の人物で、紅葉との話は尽きぬものであったに違いない。

紅葉が、後から、場合によっては完膚なきまでに手を入れた共訳の仕事をする間に、秋濤は紅葉の知らないパリのさまざまな面を語り、根からの都会の子である紅葉を魅了したことであろう。

女性の衣裳に、日々の食事に、酒に、その他日常の生活の些時に、生の飲びと美を見出そうと努めるフランス人の、それも特にパリジャンの生活をよく観察し、つぶさに味わった秋濤から紅葉が教えられたものは、粋とか俠とかいうような美の理想は、情によってではなく、知によって価値づけられなければならないものであるということであった。

ここで長田秋濤の翻案した戯曲として、秋濤が1892年にコメディイ・フランセーズでの再演を観ているエドゥアール・パイユロンの「退屈している人びと」(註4)について見てみたい。長田秋濤の数少ない研究書のひとつである中村

光夫氏の「質の偶像」^(註5)には、つぎのように述べられている。

このパリ社交界の諷刺劇は、実在の人物を材料にしたといはれ、モデル論義をまきおこした。

セラン伯爵夫人のサロンは、政界、官界、文壇等に大きな勢力を振り、出世を願ふ者はみなパリ郊外にある彼女の学問を愛好するサロンに集つてくる。第一幕はサロンに接した控への中で、若い副知事のレイモンと妻のジャンヌが登場し、夫が善良で野育ちの妻に、ここに招かれて滞在することは出世の大切な階段になるから、言動をつつしみ上品で学問ありげに振舞ふことが肝要と云ふ。やがて女主人のセラン伯爵夫人、彼女の伯母にあたるレヴィル公爵夫人などが登場する。そこに伯爵夫人の息子のロジエが丁度印度からかへるが、彼が会ふのをたのしみにしてきた養ひ子のスウザンヌをはじめ、来訪する夫人たちや、滞留中のイギリス女リュシイなど、家中の女性たちは学者ベラックの風采と学識に夢中になり、争つてその講演をきかうとしてゐる。ただ老公爵夫人だけが、冷静に事態を直視して、若者たちの幸福をはからうとする。

劇の筋はベラックがリュシイにあて、夜十時に温室で構合することを約した無署名の手紙を、彼女が紛失し、スウザンヌがそれを拾つてロジエのものと誤解するところからもつれだすが、第二幕にベラックの講義と貴夫人たちの馬鹿げた讃辞なども織りこんで、第三幕の温室の場を迎へる。

そこに滞在中別居を強ひられてゐるレイモン夫妻、ベラックとリュシイ、ロジエとスウザンヌの三組が前後して現はれ、おのおのの恋愛と誤解の滑稽を演じ、最後に老公爵夫人の適切な計らひで、二組の幸福な夫婦が誕生する。

以上のやうな他愛ない喜劇であるが、全体の主題が、モリエール以来の、サロンの似而非才女たちの術学趣味への諷刺と、マリヴオ風の恋愛と誤解の葛藤とをなひませたもので、いはばフランス喜劇の伝統的な水脈を二つ併合し

た作品といへる。

長田秋濤はこの戯曲を翻案して「三恐悦」と題した。中村光夫氏は、秋濤がこの仕事に着手したのは、台湾から帰って、伊藤博文と外遊するまでの間であろうと推量している。^(註6)そして数年間あたためた後、明治31年の7月から8月にかけて『中央新聞』に連載した。「現今政界の状態未曾有の滑稽を極むるの時仏国随一の政治滑稽劇『三恐悦』を掲ぐ。」という予告のもとに発表されたものであるが、内容はそういうものではなかった。

話を少し転じて原作の「退屈している人びと」についての安堂信也氏の説明を挙げると「パイユロンは学界，文壇，政界，社交界の無意味さ，偽善，虚栄等を明るく上品に風刺し，気のきいた冗談やギャグを巧みに風俗描写と織りまぜている。しかし，その風刺には，上流社会に対する批判は少しもなく，むしろ，それに迎合しているといえる。スクリープの流れをくんで，この作品も，他の同時代のものと同様，劇作術上非常に巧妙で，どの役も光り，軽いリズム感に満ちたウエル・メイド・プレイのひとつである。」^(註7)とある。

西洋へ行くのに，家族と水盃をして出発するのが通例であつた時代に，西洋芸術を学ぶことが，（たとへそれが「享楽主義」の芸術であらうと）他の文物の修得と同様ストイックな勉強の対象であつたのは当然であらう。

秋濤のやうに生活をたのしみ，ゆたかにする芸術の側面に，実践的にふれることができた者は実に稀な例外であつた。

しかしこのやうな社会生活のひとつの歯車としての芸術の役割は，西洋における芸術の存在形式の重要な特色をなしてゐる。

かういふとむづかしいが，西洋では芸術が何かの理窟をつける前に芸術としての旨味を公衆から要求されるのにたいして，我国の西洋芸術研究は，料理の味を無視してカロリーや栄養素の分析に専念してゐる。

さういふなかで，秋濤はいきなり芝居の旨味をあちはってしまった。ほかの

ことはともかく、この旨味を我国に「えつちらおつちら運んでこよう」とした。

中村光夫氏がこのように分析している秋濤の性格と、彼の辿った、あるいはいみでは非常に華やかな運命とは、秋濤を考える上で、ぜったいに無視することのできないものである。

前述のピユロンの「退屈している人びと」の翻案「三恐悦」が、秋濤としては珍らしく数年間寝かせた翻案であり、興行的には失敗したものの^(註8)彼の情熱を傾かせたものであった所以は、前述のように「上流社会に対する批判は少しもなく、むしろ、それに迎合している」ものであったからであろう。西園寸公望が、ジュディット・ゴージェのサロンの客となり、「蜻蛉集」の成立に多大の寄与をなしたとあるいは比肩し得ることかも知れないが、秋濤は劇場の楽屋に出入りし、世紀末の芝居者の雰囲気、身に帯びて帰国したのである。あるいは私濤のもっともよく識る上流社会はモリエールを、ピユロンを、あるいはマリポーを通してのものであったかも知れない。すなわち、上演された戯曲を通し、女優の紛する貴夫人の台詞廻しの巧みさや言葉の響きの美しさによって、学者ぶる女、学問を崇拜し過ぎる女の典型を把んだのかも知れない。

「三恐悦」翻案にたいする、秋濤としては珍らしいほどの情熱の源は、多少とも現実のサロンを知りながらも、現実のものよりもさらに洗練され、洒落になっている舞台の上に仕組まれるサロンを深く識る人物が、ぜひとも今度は自分の手がけたものを舞台にのせてみたいと思う熱意であろう。

秋濤の本場仕込みと定評のあったフランス語についての「本場仕込み」とは、単に二十代の留学生としての数年間のパリ滞在を意味するものではなく、フランス語中のフランス語、フランス語の華ともいふべき、生きた芝居の台詞を味わい得たことを指すものと言ってよかろう。「質の偶像」には、またつぎのようにある。

「退屈な世界」がモリエール、マリヴォオの伝統をひく精緻な台詞劇であり、「三恐悦」もこのフランス近代喜劇の特質をはつきり生かした翻案である以上、この上演のされかたが、いかに致命的であるかは、云ふまでもない。

壮士芝居の一座により、しかもその一座の内部にもめごとのある時期に上演された「三恐悦」が失敗に終わったのはいわば当然の成り行きであったが、精緻な台詞劇こそが演劇の魅力の真髄であること、演劇改良の本道はここにあること^(註9)、さらには読む戯曲の存在を、秋濤は折にふれ、紅葉に語っていた可能性が濃い。「退屈な世界」の翻案戯曲「三恐悦」はその一例に過ぎないが、サロンの会話の妙味、社交の魅力、何層ものヴェールを被せた権謀術数などこそが、直接間接に秋濤の体験して来たパリである。軽妙洒脱な会話の妙味を文学のもっとも重要な要素とみなす紅葉を、控え目に考えても、この点においてだけでも魅了したことは確実である。

マリヴォー(1688—1763)は二十二、三歳の時に、一旦引っ込んでいたリモージュからパリに出た後およそ十年間は、ド・ランベール侯爵夫人やド・タンセン侯爵夫人など、新しい文学を愛する人びとの集うサロンに出入する他はほとんど何もしないで過した。サロンでの会話、その洗練された趣味、粗野なものを避けながらしかもあくまで自然さを尊ぶ(人工の限りを尽しながらも)精神は、マリヴォーの気質に、あくまで適ったものであった。彼は生涯に約三十篇の戯曲を書いているが、彼が四十余歳の時に著わした「愛の偶然との戯れ」(原題“Le Jeu de l'Amour et du Hasard”)は、もっとも油の乗った作品のひとつと言えよう。そのあら筋はつぎのようなものである。

パリの富裕な市民オルゴン氏の息女シルヴィアは、オルゴン氏の友人の息子ドラントと結婚させられそうになる。シルヴィアはドラントがオルゴン家を訪問する際、その性情などもよく見抜けるようにと、小間使いのリゼットを自分の身代りに立て、自身はリゼットになります。いっぽうドラントも同じような

ことを考えて従僕のアルルカンになりすまし、アルルカンはドラントに扮して来訪する。ドラントの父はオルゴン氏に手紙によってそのことを知らせてあるがオルゴン氏はこの秘密を息子でシルヴィアの兄に当るマリオだけに打ち明ける。ドラントとシルヴィア、アルルカンとリゼットはたがいに好意をいだき合うが、二組の男女とも、身分のちがう相手を恋していると思ひ込み、悩む。ことにドラントの苦悩は深刻で悩み抜いた挙句、突如郷里に帰る決意をする。一旦オルゴン家を辞したものの、ドラントはまた戻って来て、召使いだと思ひ込んでいるシルヴィアに身分の違いを超えて結婚を申し込む。その後ではじめて真相が明かされ、二組の男女の婚約が成りたつというものである。進藤誠一氏は『フランス演劇』においてマリヴォーをつぎのように分析する。

彼はその知的な眼をもつて分析し、観察した女性心理の実相を案配し、結合するにあつて、或は感動、或は同情等の効果によつて、その作為のあとを被ひ隠さうとはしない。彼は自身が心理の分析、観察に当つて経験した知的の満足、吾々に同感せしむれば、彼の目的は達せられるのである。吾々は彼の手引きによつて女性心理の迷路を探険し、その奥深い、神秘的の機構を眼のあたりに見学することによつて、知的満足を味ふのである。

ヴォルテールがマリヴォーの戯曲を評して「形而上学的喜劇」といつたのは勿論揶揄の意味であるけれども、この評語もまたマリヴォーの喜劇の一つの特色を穿つてゐる。

「マリヴォーはパストラールの世界を現代に置きかへ、パストラールの中に流れる溫柔な、優婉な気分、ラ・ Fayette 夫人流の鋭利な心理観察を加へたのである。」と進藤氏はさらに論述する。「愛と偶然との戯れ」ももちろんこの例に洩れないが、この戯曲の後半に入ってからドラントとシルヴィアとの心理描写こそ出色のものであって、残念ながら紅葉の翻案「八重襷」には見られない部分であるが、はじめ、冒頭の部分を挙げてこれら東西両戯曲につい

て考察してみたい。

第一幕第一場，シルヴィアとリゼットが登場していて，結婚に気のすすまないシルヴィアを，リゼットが励ましている場面である。

Lisette: Quoi! vous n'épouserez pas celui qu'il vous destine?

Silvia: Que sais-je? peut-être ne me conviendra-t-il point, et cela m'inquiète.

Lisette: On dit que votre futur est un des plus honnêtes hommes du monde, qu'il est bien fait, aimable, de bonne mine, qu'on ne peut pas avoir plus d'esprit, qu'on ne saurait être d'un meilleur caractère; que voulez-vous de plus? d'union plus délicieuse?

Silvia: Délicieuse! que tu es folle avec tes expressions!

Lisette: Ma foi, Madame, c'est qu'il est heureux qu'un amant de cette espèce-là veuille se marier dans les formes; il n'y a presque point de fille, s'il lui faisait la cour, qui ne fût en danger de l'épouser sans cérémonie. Aimable, bien fait, voilà de quoi vivre pour l'amour; sociable et spirituel, voilà pour l'entretien de la société; pardi! tout en sera bon, dans cet homme-là; l'utile et l'agréable, tout s'y trouve.

(註11)

この引用の最後の部分にも垣間見られるように，精緻な台詞劇を支える大きな要素のひとつは，召使いの饒舌である。召使いは多くの場合，主人をしのいで衒学的，哲学的で言葉の遊びの大家であり，誰よりも才気に満ちている。

「八重襷」の第一幕第一場には令嬢薔薇子，召使いおはすがシルヴィ，リゼットと同じように登場するが，薔薇子は三人の親友が婚家で苦勞しているのので，自分も縁談には気がすすまないと言い出し，おはすは受け身で，主人の豪商寿右衛門の気分を損ねないようにとのみ気を遣って薔薇子にたてつく。

尾崎紅葉と西洋文学

は「これが貴方お嬉しくなかつたら、女の一生に嬉しい事があるものでござい
すか。それぢや、貴方はお可厭なんでございますか。」

薔「あゝ、可厭だよ。」

は「ぢや、先方様がお気に入らないんでございますか。」

薔「考へて御覧な、気にも何にも入りやうが無いぢやないか、見たことも無
い人を。」

は「でも、御婚礼あそばすと云ふ事は嬉しいのでございませう。」

薔「些も嬉しくはないわ。不見不識の他人の中へ入つて、艱しい機嫌を取つた
り、つまらない気兼苦勞をしなければ成らないのぢやないか。それよりは一
生恁うして娘で居て、親の傍で我儘を言つて、気楽に暮して居る方が、幾許
可いか知れはしない。私は些もお嫁なんぞに適きたくはないのだよ。」

は「私もお嫁の味は存じませんが、決して然云ふものぢやないさうで
ございますよ。其の証拠には誰でも御婚礼を致すぢやございせんか。そりや
貴方、お嬢様、樂みでございますよ、好うございますよ、好いに違ございま
せんわ。私は好いと想ひます、そりや屹と好うございます。お嬢様、好うご
ざいますよ。」

以上のような部分が「愛と偶然との戯れ」の前述の部分に当るものである。
召使いおはすが八方へ気兼ねをして主人の家族関係を、ともかく円満に取りま
とめたいと思う他、結婚にたいする考えも、滑稽めかした「好うございますよ。」
という台詞の他には何もない。薔薇子の方も、大川遊、新田苗、横原板子とい
う親友が、おのおの陸軍中尉鬼柴の酒乱、物産会社々員船積の惰奢、医学士藪
内の浮気に苦しめられているところから結婚はしたくないといい張るだけであ
る。富豪福富寿右衛門も平凡であり、ひとり書生の古里遠のみ、原作以上に光
っている。

第一幕第一場「珍客」の場面で、春山の書生実は春山優雄はつぎのように歎
く。

優「(前略) 彼も一寸推出した処では、顔色だつて太く拙くもなし、体格は別して善し、半分は服装で威して了ふから、まあまあ春山優雄で通らん事は無いのだけれど、野卑な事を言ふのと、目先の見えないのと、而して那の大食には誤る。此方が始終軍師として附いて居れば、又何か恁か傍からお茶を濁しも為るけれど、手放たら大変物だらう。

夫に、奴はまあ何為那も卑く出来て居るのだらう。一昨日家を出るから今日までに那の百本入のマニラの箱を大方喫して了つて、眩暈がして胸が悪くて克はんと云つて騒いで居るのだが、聞いて見ると、今月は葉巻の豊年だから喫置を為るのだとは如何だらう。(後略)」

また第六幕「庭内」の場では優雄実は古里遠と薔薇子実はおはすが、離れの茶室で語らうのであるが、古里は非常に雄弁である。

古「何為、行かんことが有るものか。苟くも福富寿右衛門氏の富を以てして、其の愛娘の婿たるべき春山優雄を饗するに於てをやだ。麦酒に西洋料理が可い。それも上等でないと皿数が少いから、上等を命じる。麵包牛酪や水菓子は要らんから、其分を何か一皿加けるやうに、而して麦酒は二本。」(中略)

古「それが男子たる者の疵にならんでせう。吾人が大食をすると、腹の中に乞食が居候でもして居るやうに言ふけれどもが、決して那樣ものが居るのもなければ、又所謂虫の所為でもない、畢竟は胃が強いからで、言換れば体が壮健なのだ。体が壮健でなければ長生が出来ん、長生が出来んければ、夫婦になつても其の樂みを続けることが出来ん。なあ、令嬢、然うでせう。ところが最も考ふべき所ですよ。恁う見た所、令嬢も頗る壮健だ。」

「愛と偶然の戯れ」で、ほぼ前述の部分に当るような所を挙げてみると、先ず第一幕第九場のドラント、アルルカン登場の場面である。(註13)

Arlequin : Eh bien, monsieur, mon commencement va bien ; je plais déjà à la soubrette.

Dorante : Butor que tu es !

Arlequin : Pourquoi donc ? mon entrée est si gentille !

Dorante : Tu m'avais tant promis de laisser là tes façons de parler sottés et triviales ! Je t'avais donné de si bonnes instructions ! Je ne t'avais recommandé que d'être sérieux. Va, je vois bien que je suis un étourdide m'en être fié à toi.

Arlequin : Je ferai encore mieux dans les suites ; et, puisque le sérieux n'est pas suffisant, je donnerai du mélancolique ; je pleurerai, s'il le faut.

古里とおはすの離れの茶室の場面は、第二幕第五場のアルルカンとリゼットの場面にほぼ当る。(註14)

Arlequin : Ah ! Madame, sans lui j'allais vous dire de belles choses, je n'en trouverai plus que de communes, à cette heure, hormis mon amour qui est extraordinaire ; mais, à propos de mon amour, quand est-ce que le vôtre lui tiendra compagnie ?

Lisette : Il faut espérer que cela viendra.

Arlequin : Et croyez-vous que cela vienne ?

Lisette : La question est vive ; savez-vous bien que vous m'embarrassez ?

Arlequin : Que voulez-vous ? Je brûle et je crie au feu.

アルルカンはマリヴォーにあってもはや単なる道化ではなく、複雑な性格をもっているが、この場面ではその古典的な名前に示されている通り、自分では

かなわぬものと思いついでいる恋に身を灼く道化であり、その恋心を吐露するばかりである。例えばモリエールの「ドン・ジュアン」におけるスガナレルのように、主人を凌ぐ饒舌や哲学を持つ存在ではない。リゼットの方が遙かに才知があり、狂言廻しの都合より以上に貴婦人のような言葉遣いや振舞いをすることもでき、人生観も独特のものを持っている。

「八重襷」のおはすは到底リゼットの敵ではないが、古里遠は紅葉の手によって、ある面ではアルルカンを凌ぐ人物として創られたと言えよう。

笈を負うて東京に出、文学修業をも一種の出世の手蔓とみるような書生群の中から、古里は誕生したと言えよう。例えば硯友社の異分子として苦労した田山花袋などを彷彿させるのが古里遠である。柳田泉氏の「田山花袋の文学」の中につぎのような描写がある。

然し花袋のとらえた東京は、表面的現実の推移であるが、その表面的現実の推移の底には、一層激しい近代的な経済都市の建設が進行しつつあった。將軍のお膝下から、中央政府の首都として、徹底したブルジョア都市になりきろうとつとめつつあった。(なりきったかいなかはここでは問はない。)東京のそういう面は、十七、十八の花袋の眼には、まだそう注意をひかなかつたであろう。だが、全体、花袋は自家の立身出世、一身一家の浮沈にはむきになるわりあいに、天下国家のことには、そうむきになっていない。

花袋の才能、努力は紅葉の創った古里の遠く及ばないものであったかもしれないが、こうした書生の熱気、貪欲、自負などは、あるいみでは、都会人紅葉の、西欧小説の筋を漁る熱意にも通ずるものであった。そして「愛と偶然との戯れ」のアルルカンが主人を凌ぐ才質を持ちながら永遠に主人の属する階層の中には入り得ない、また入ろうともしない召使いであるのに比べて、古里はその粗野な精気を傾注して努力することによって、主人の側に入ることができ、場合によっては主人以上の階層の人間となることもできるわけである。この若

い明治の覇気を時代の雰囲気として充分に感じ取っていた紅葉によってこそ、古里はアルルカン以上にいきいきと造型されたと言い得る。

ドラントとシルヴィアの苦悩は、前述したようにこの戯曲の中心であるが、優雄と薔薇子の苦悩も、紅葉は「不機嫌の上」、「不機嫌の下」、「共ふさぎ」などの場を設けてかなり克明に翻案を行なっている。しかし原作と全く異なるのは、それに続く「道端」の場である。これを「愛と偶然の戯れ」についてみると、すっきりと率直である。

Silvia, à part : S'il part, je ne l'aime plus, je ne l'épouserai jamais...
(Elle le regarde aller.) Il s'arrête pourtant ; il rêve ; il regarde si je tourne la tête : je ne saurais le rappeler, moi... Il saurait pourtant singulier qu'il partit, après tout ce que j'ai fait... Ah ! voilà qui est fini : il s'en va ; je n'ai pas tant de pouvoir sur lui que je le croyais. Mon frère est un maladroit ; il s'y est mal pris : les gens indifférents gâtent tout. Ne suis-je pas bien avancée ? Quel dénoûment !...Do rante reparaît pourtant ; il me semble qu'il revient ; je me dédis donc ; je l'aime encore... Feignons de sortir, afin qu'il m'arrête : il faut bien que notre réconciliation lui coûte quelque chose.

Dorante, l, arrêtant : Restez, je vous prie ; j'ai encore quelque chose à vous dire.

Silvia : A moi, monsieur ?

Dorante ; J'aide la peine à partir sans vous avoir convaincue que je n'ai pas tort de le faire.

ところが「八重櫻」の方は、第十場「道端」において、黄表紙風の笑いを伴った場面に優雄の苦悩をあしらった形で、これがこの戯曲の重要な場面となっている。薔薇子は優雄に言葉では何も言わず、一連の仕草をしてみせる。優雄

は薔薇子のその仕草を頭にたたき込み、心の中で反覆しながら古里を連れて福富家を一旦辞去する。これは前述したように、彼がまだ召使だと思い込んで薔薇子を思う気持が募るのを、自ら押えつけようとの気持からであった。この点は「愛と偶然との戯れ」と同様である。福富家を辞去してすぐ、まだ紳士姿のままの古里は薔薇子の誕生日に当るこの日の昼饗にありつけなかったことを悲しみ、道端で剣舞をはじめ。それを嗤う優雄もまた道端で仕方話をやり出して古里を心配させる。

雄「漸く首の方だけ解つた。恚うだて、包の中には砂糖だらう、それを三度振つた、で、是がふるさとう三だ。又二度振つたから、二だ。ふるさとう三二は如何だ。」

古「古里さんにですか、な、な、黄なる絹にして幼き婦なる哉。な、な、な。」

雄「それから、両手で恚う脛の下を劃るのは、是は(首たけ)に極つて居る。それ、地を掘る状だから、ほれる敷ほれた敷だらうけれど、其跡を眺めて、一寸首を撚るのが、どうも解らんよ。」

古「な、ほれた跡を眺めて考へるのですな。」

雄「然う、なあ、首たけ惚れた後を能く見て考へるかな、」

古「と先づして措いて、其先の振つては一つ投げ、二つ投げは何云ふものでありませう。」

雄「惚れた跡を能く見て考へれば、ちぎつてから投げられる？」

古「投げてから味噌を付ける。」

雄「真面目に真面目に、恚つと、投げたのを結ぼうとして、結ばれんと。」

古「結ばれんから考へたのですな。」

雄「お、然うだ、ちぎりが結ばれんと解くのだ。」

このような形で、まだこの問答は延々と続き、ついに優雄は「ふるさとう三

二、首たけ、ほれては居るが、ちぎりの結ばれぬ其の訳は、後から解る」と解く。主従二人は優雄が急病に罹ったことにして福富家に引き返し、恋患いで床についた薔薇子と対面する。その後、大詰近く、第十一場「舞もどりの下」においてはじめて、薔薇子の兄の延太郎は一計を案じ、実は自分は薔薇子の兄ではなく許婚者であると述べて、優雄を騙す。

「愛と偶然との戯れ」は、整然と三幕から構成されていて、その三幕はほぼ等分に分けられているが、九場から成るこの幕の第二場において既に、マリオは妹シルヴィアの懇望によってシルヴィアの許婚者を気取り、ドラントを絶望させている。身分の隔りに加えて、兄とのみ思い込んでいたマリオがかねてよりシルヴィアを愛していたということ、それこそが決定的にドラントを打ちのめす。その絶望の深さから、より一層、ドラントにはシルヴィアに対する恋心が募るのであり、マリヴォーをラシーヌの系列とみなす見方も、ここに充分納得できるわけである。「三幕より成る喜劇」と自ら称しながら、古典的な悲劇の簡潔さ、荘重さからの伝統を引いている戯曲であることを否応なく納得させるマリヴォーのこの傑作の特色もここにある。

紅葉は翻案にさいして、先ずその「筋」を第一に考える心から、可笑味に目をつけ、その可笑味を強調した。「八重櫻」の第十二場、すなわち終景は、つぎのように結ばれている。

薔「そんなら貴方が春山さま。！」

雄「貴方が薔薇子さんでありましたか。！」

は「あら、貴方は書生さん？」

古「何か、然う言ふ貴様は。！」

寿「まつ目出度い。！」

延「テトツツンテトツツン、ツトツツンツトツツン、」

と口三味線にて立上り、煙管筒を扇子に換へて左の袖に承けながら、しやなりしやなり 嬶 嬶

と其に顕れて、

延「蓬萊に聞かばや伊勢の初だより，トンチントンチントンチン，チンチンチンリンチンリン，チンチリリリリン……。」

併列して「愛と偶然との戯れ」の終景（第三幕第九景）を挙げてみる。（註15）

Dorante: Je ne saurais vous exprimer mon bonheur, Madame; mais ce qui m'enchant le plus, ce sont les preuves que je vous ai données de ma tendresse.

Mario: Dorante me pardonne-t-il la colère où j'ai mis Bourguignon?

Dorante: Il ne vous la pardonne pas. il vous en remercie.

Arlequin, à Lisette: De la joie, Madame! Vous avez perdu votre rang; mais vous n'êtes point à plaindre, puisque Arlequin vous reste.

Lisette: Belle consolation! il n'y a que toi qui gagne à cela.

Arlequin: Je ne perds pas: avant notre connaissance, votre dot valait mieux que vous; à présent, vous valez mieux que votre dot. Allons, saute, Marquis! (註16)

「愛と偶然との戯れ」は1730年1月23日、イタリア劇団^(註17)により上演された。イタリア劇団は1680年代に入るとフランス人作家にフランス語の戯曲を書いてもらうようになったが、それより約半世紀を経て著わされたマリヴォーのこの作品は、ことに輝いている。当初、イタリア劇団はフランス語の不備を補うための必要性も一因となって、特に表情や動作を重んじたと言われる。併せて新進作家を重んじる精神を伝統的に持っていたので、マリヴォーの作品のような精緻な台詞劇を成功させたわけである。

洗練された簡潔さ、古典的明晰性が、いわゆる marivaudage^(註18)を通してもうかがえる。紅葉はおそらく、はじめ秋濤を通してマリヴォーを識ったので

尾崎紅葉と西洋文学

あろうが、ここに日本の“marivaudage”は黄表紙風の洒落や地口として一応、根をおろしたと言えよう。硯友社一派の作家の文学修業を考える時、「愛と偶然との戯れ」の翻案「八重襷」の“marivaudage”も修業のひとつの過程であったと言ってもよい。また「八重襷」以後の紅葉自身にも、この翻案は大きく影をおとしていると言えよう。

註1：『早稲田文学』大正14年6月号。

註2：『明治村通信』第53号。昭和49年10月発行。

註3：星野天知編『透谷全集』。明治35年刊。

註4：Eduard Pailleron (1834—99)

“Le monde où l'on s'ennuie” (1881)

註5：正しくは伝記体小説。昭和41年1月号より12月号まで（9月号を除く）『展望』に連載。

註6：伊藤博文と長田秋濤とは真実の親子ではないかとの風評が立つ程の親交があった。この点も「贗の偶像」に詳しく考究されている。

註7：日本フランス語フランス文学編会『フランス文学辞典』中の項目「退屈している人びと」

註8：明治31年夏、川上音二郎一座との間に「三恐悦」の話がまとまったが、いわゆる壮士芝居の脚本軽視、川上一座の内紛などがわざわざいし、ついに興行師が介入して上演が中止された。

註9：秋濤の演劇改良運動はこの通りには行なかった。このことはここでは枝道に入るの
で、直接触れない。

註10：M. Arland “Marivaux” Galnier 1950 M.-J. Durry “A propos de Marivaux”
S. E. D. E. S. 1960 進藤誠一『愛と偶然との戯れ』解題 1934

註11：進藤誠一氏の訳文では、つぎの通りである。

リゼット まあ、では、旦那様がお決め遊ばしたお躰様と、御結婚なさらないのでございますか？

シルヴィア そんなことが、どうしてわかって？まるっきり、あたしに不釣合な方かもしれないじゃないの？だからあたし、不安なんだわ。

リゼット 人の噂によりますと、お躰様は紳士の中の紳士でいらっしゃって、お姿がよくて、お優しくって、美男子で才気のおありのことこの上なく、御性格はごく上等でいらっしゃるそうでございます。この上まだ、何が不足なんでございます？こんな嬉しい御結婚が、こんなふるいつきたいような御縁組が、二度とまたお考えになれまして？

シルヴィア ふるいつきたいだって、馬鹿だねえ、そんな言葉づかいをして、

リゼット お嬢様、本当にこんな殿方が、正式の結婚を申し込んで下さるなんて、まったく有難いことじゃございませんか。こんなお方にちやほや言われましたら、たいていの娘は、正式の手続きを履まずにお嫁になってしまう危険が、十分にごさいますわ。お優しくって、御容子のいいのは恋の資格、交際家で才気がおありになるのは、世間のおつき合いに理想的。実にもう、この殿方は何から何まで結構くくめ、趣味と実益兼ね備わるとはこんなお方のことでございませうねえ。

註12：モリエールの「ドン・ジュアン」の従僕スガナレルなど、その好例であろう。

註13：同上訳文ではつぎの通りである。

アルルキャン 旦那様、いかがです。しょっぱなは巧くいきました。もう、女中に好かれておりますよ。

ドラント ばかだなあ、貴様は、

アルルキャン どうしてですか？ あんなに愛嬌よく登場したじゃありませんか。

ドラント 貴様のその、ばかな、下等なもの言ひを止めると、あれほど約束したんじゃないか、あれほどよく教えておいたのに、ただ真面目にしてくれって、そればかり言っておいたのに。ああ、お前を信頼したのが軽率だった。

アルルキャン じゃあこれからは、もっと巧くやりますよ。そして、真面目だけでは不足とおっしゃるんでしたら、憂いを利かせましょう。なんなら泣いてもようございませう。

註14：同上訳文ではつぎの通りである。

アルルキャン あっ、お嬢さん、せっかく、素晴らしいことを、お話ししようとしていたのに、あいつが来たおかげで、月並みなことしか思い出せなくなってしまいました。しかし、僕の恋は月並みではないのですよ。無類とびきりの恋です。ですが、僕の恋と言えば、いったいいつになったら、あなたの恋が道連れになって下さるんです？

リゼット そうなるのを、待っていらっしやらなければいけませんわ。

アルルキャン そして、近いうちに見込みがあるとお考えですか？

リゼット ずいぶん、急なお尋ねですのねえ。あたし、ほんとうに、なんと申していいか、困ってしまひますわ。

アルルキャン だってしかたがありませんよ。僕は燃えているんです。だから、火事だ、火事だ、とどなっているんですよ。

註14：同上訳文ではつぎの通りである。

シルヴィア (傍白) 帰ったりしたら、もう愛してやらないから、もう決して結婚なんかしないから…… (彼が去って行くのを見る) でも、あたしが、これだけのことをしたあげく、あの人が帰っちゃったりなんかしたら、変なものだわ、……ああ、だめだ、行

尾崎紅葉と西洋文学

ってしまう。自惚れていたほどあの人を動かす力なんか、あたしにはなかったんだ。お兄様がへまなんだわ。まずいことをしてしまったんだわ。思いやりのない人は、なんでも事を壊してしまうもんだ。うまくいったもんじゃないこと？ なんていう結末でしょう。／＼……あら、ドラントさんが、また現われたわ。戻って来るようだ。じゃあ、あたし前言を取り消すわ。やっぱりあの人を愛してる……出て行くふりをしてやろう。そしてあの人に呼びとめさしてやろう。仲直りをする前に、少しあの人を懲らしてやらなくちゃ。

ドラント (彼女を呼び止めながら) 待って下さい、お願いします。まだあなたに話したいことがあったんです。

シルヴィア わたくしにでございますか？

ドラント 僕が発つのは、僕が悪いのではないということを、あなたに十分納得させないで、出発することは辛いです。

註15：同上訳文ではつぎの通りである。

ドラント シルヴィアさん、僕は僕の幸福を、口で言い表わすことができません。ですが、一番嬉しいことは、僕の愛情の証拠を、あなたにお見せするのができたということです。

マリオ ドラント君は、僕がブルギニョンを怒らしたことは、勘弁してくれるでしょうね？

ドラント 勘弁しません、感謝します。

アルルキャン さあ、陽気になったり、お嬢さん。あなたの身分はなるほど下落したよ。しかし、アルルキャンはやっぱりあんたのものなんだから、悲しむことはないじゃありませんか。

リゼット 結構な慰めなこと。／＼ 得をするのはお前さんばかりだわ。

アルルキャン わたしは損はしないさ。お互いの本性を知るまでは、あんたの持参金のほうが、あんたよりえらかったが、今ではあんたのほうが持参金よりえらいだけのことさ。さあ、祝って踊るんだ。

註16：Allons, saute, Marquis! est emprunté un monologue du Marquis dans le Joueur de Regnard (IV, 10) ("Marivanx théâtre complet" notes de B. Dort.)

註17：フランス王室づきのイタリア人俳優の劇団を指す。1660年以降、フランスに定住した。

註18：はじめは Marivaux にたいする非難の言葉として、気取り過ぎ、洒落過ぎた文体をあざ笑ったものであったが、後に普通名詞化され、持って廻った、凝った文体を指すようになった。しかし本来は文体そのものを指すものではなく、恋愛心理の曲折の表現を指すものでろう。